

もったいない! 未来のために  
母の視点で**よりも**で見直し  
次世代に借金、リスクを残さない

# 県議会議員 西村久子 県政報告

第43号

発行 西村久子

彦根市甲崎町

TEL・FAX 43-4700

Eメール hisako@country-farm.net



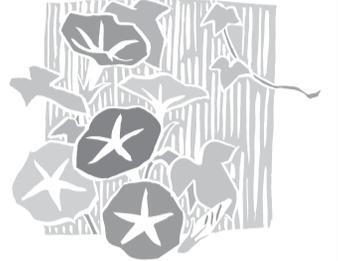
## 今日よりも明日

空梅雨、紫陽花が色を失って、高温続きのカラカラ天気、玉ねぎや馬鈴薯、ソラマメ…もろもろの作物がさっぱり大きくなりませんでした。少しぐらいの水をやったって追いつきません。天からいただく雨はなんと大きな力を持っているのでしょうか。待ち遠しい雨ですが、今度は降り出したら止まらないかも……。穀雨の程度にしてほしいものです。

本年は四月に臨時議会があり、宇賀武議長が誕生しました。私は議会運営委員長をお預かりし緊張の毎日です。議会最終日、今までお務めいただいた荒川副知事が、国にお帰りになるのを受けて、西嶋栄治副知事が選任されました。知事公室長、琵琶湖環境部長・総務部長等々歴任の県政に明るい方です。

彦根市では、大久保市政が張り切ってスタートされました。県政との関係もイメージチェンジが期待されます。その時々々の為政者の心血注がれたまちづくりに等しく敬意を表し、加えて新しいエネルギーがさらに活力を生み出していくものと信じ、力を合わせていきたいと思えます。

国政においては参議院議員選挙、彦根市の低い投票率、国民に与えられた最大の権利です。今度こそ多くの市民が意思表示していただくことを願っています。期日前投票もフルに活用して…さあ、投票に行きましょう……。



### 6月定例会一般質問抜粋

### 愛知川伏流水の復元について… 土木交通部長(答弁)

かつて愛知川は、現在の河床より高い位置にあり、川底には絶えず伏流水があり、清涼かつ、いかなる干ばつでも枯れることがなく、沿岸住民の大切な飲料水・防火用水、その他日常生活用水となり、特にまた重要な灌漑用水となってきました。

一方、この伏流水は、ハヤやゴリ、ウナギ等多くの魚を育て、初夏にはホタルも飛び交うなど、自然豊かな情景を醸してありました。郷土の歴史書「稲枝の歴史」には、こうした底樋は過去6カ所ありましたが、現存は服部の「瀬首井」、本庄町の「落尾井」、田附町の「湯の花井」の3カ所です。

これら底樋は、約二百数十年前に設置と推測されていますが、この中で由来が一番はっきりしている田附町の「湯の花井」は、改修工事としては大正2年、耕地整理事業として大改修が行われています。冬の渇水期に、河原の底を対岸に向けて非常に深く掘り割り、桶を埋めて流水を導き、二重堤を築いて樋門を設け、湯淵を改造するなどの大工事であったと記されています。

当時トロッコのほかに機械はなく、ただ人力だけで、しかも極めて短期間にこの空前の工事が完成され又、膨大な経費が費やされたとも書かれています。

ところが、平成14年以前、愛知川砂利組合により大量の土砂が採取されたことに加え、14年以降はダムからの放水時、流水が表土をえぐり河床を徐々に下げていること、又、愛知川全体に雑草雑木が繁茂し、川の流れを変える等が原因し、現在、底樋が見える状況をどのように改善していただけるのか、質問します。

1 愛知川の河床を現在の河床まで下げる計画決定を行ったのは、どの時点でどの機関が行ったのでしょうか。

答 愛知川につきましては、栗見橋からJR琵琶湖線までの約5キロメートルを平成8年度に広域河川改修事業の重点整備区間として河川管理者である県が計画を策定しております。

計画におきましては、伏流水などの水利用に支障が生じないよ

う、基本的に現状のみお筋を下げずに堆積した土砂や高水敷を掘削して流下能力を確保することとしております。

2 計画決定された後、底樋への対応や、伏流水を利用した在所川を活用する住民への説明等、具体的にはどのようにされたのかお尋ねします。

答 「湯の花井」付近の計画に関する住民の皆さんへの説明につきましては、改修工事に先立ちまして平成13年度に幾度か行っております。

その際、住民の方からは、「改修工事において、「湯の花井」の水量が低下する恐れがないか。」との質問がありましたが、みお筋を切り下げない計画としているため、取水量に変化は及ぼさないと説明をさせていただいております。

また、住民の方からの要請を受けまして、平成14年度に「湯の花井」の底樋の状況を確認するための試掘調査を地元の皆さまの立会のもとで実施し、底樋が機能していることを確認をしていただいたところでございます。

3 愛知川砂利組合に河床の砂礫採取の認可を出したのはどの機関だったのか、又、採取を認可した理由をききます。

答 愛知川砂利採取業協同組合の砂利採取につきましては、河川管理者である県が認可を行っております。

愛知川砂利採取業協同組合に砂利採取を認可した区域は、愛知川の河口付近の琵琶湖と河口から東近江市永源寺高野町までの区間となっております。

愛知川の砂利採取を認可した理由は、河道に堆積した砂礫をコンクリート骨材として有効利用を図るとともに、改修計画と整合して砂利採取を行うことで、改修事業費のコスト縮減を図るためでございます。

一方、19年12月定例会では、伏流水の再生に関し、「伏流水を含めた流水量の重要性は認識している。将来にわたり動植物の生息・育成環境が保全されていること、このような環境の保全と併せて、健全な河川水の利用及び治水をセットで考えることが、河川管理者としてのこれからの方向である。今後も継続的に調査を続けな

がら方向性を探る」と、答弁されています。

過去地元自治会をはじめとする関係者から、改善要請を10回余されてきましたが、今日まで所管する所属の認定から始まり、同じ話の繰り返しで「たらい回し」されているのが現状で、平成19年および24年と、東近江土木事務所から2回にわたり、何れも「対応はできない」との文書回答で、改善の道は開けておりません。

4 平成19年の議会答弁についてどう考えておられるのか、明快にお答え願います。

**答** 平成19年の答弁のとおり、河川管理者として河川環境の保全と併せ、健全な河川水の利用と治水をセットで考えることが、重要であると認識しています。また、伏流水の調査を継続することは、現在も「湯の花井」の「井口」で水位を観測し、取水の状況把握に努めています。

地元では「湯の花井」が涸れた原因は、大幅な河床の低下により伏流水をとりいれられなくなったことであり、その原因者が原状回復するのが当然との認識をお持ちです。

この上流服部町では、やむを得ずポンプで愛知川の水を町内水路に引き込んでおられますが、電気代一昨年13万円、昨年23万円、電気料の値上げとともに今年度は悲鳴で、連続して揚水が叶わず節約して、水路の鯉の状態を見てポンプアップするなど大変な苦勞をされています。

先人が辛苦の中に伏流水を町内に取り込み、営々として地域の暮らしが成り立ってきました。しかし何としても回復を図らねば、特徴ある流域の暮らしが継続できません。県は、こうした事態に鑑み、伏流水を拾うべく井戸を掘る、あるいは底樋をさらに深く埋めなおす等への支援も含め、早急に対応を提示すべきであると思います。

愛知川を挟んでの下流、能登川方面、さらに稲枝の各神社が、4月20日に河原祭りとして神輿が愛知川の水の中をお渡りする壮大な祭りがおこなわれていました。本庄町をはじめ、沿線地域の祭り文化は、この水によって成り立っていたのです。これがなくなったことによって、若い衆制度までもが崩壊し、見る影もなくなって来ている。土地の高齢者の皆さんが、祭り太鼓の復活を叫ばれ、町内運動会でたたき出しを涙ながらに披露されたと聞いています。

5 是非とも水確保に向けて対応いただくよう求めるものですが如何でしょうか。

**答** 愛知川沿川では、豊富な愛知川の伏流水を集落内に導水し、生活用水や防火用水等の地域用水や地域の祭礼にも利用される等、過去から暮らしに近い水として使い続けて来られ、豊かな水文化が育まれてまいりました。

このような河川の沿川地域において、歴史ある水文化が継承されていくことは、河川法の目的の一つでもある河川環境の整備と保全の観点からも大切なことと認識しており、付近の工事を行う際には、「井」の機能が保全されるよう、地元の意見を聞きながら、細心の注意を払って実施してきました。

ところが、平成24年の洪水で「湯の花井」の前面の川岸が浸食され、河床部に埋設されていた底樋が一部欠損、現在取水が難しくなっているようです。このことは水位の観測結果からも類推することができます。

こうした現地の状況を踏まえ、継続的な水位調査を行うとともに、河川管理者として何ができるのかを地域の方々と話し合い、水確保に向けて努力して参りたいと考えています。

いろいろお答えいただきましたが、砂利採取による河床低下が原因とはお認めにならず、県の責任もないようなお答えで残念です。過去、愛知川は少し大きな雨が降ると山の水は直に下り、度々と堤防の決壊・洪水を繰り返してきました。その度に土砂が流され、流路が変わったことによって、大丈夫と川を渡った人が深みに足を取られて命を失うなど、「人取り川」と恐れられてき

たのです。愛知川ダムが出来てから、その一揷水がなくなり災害は激減、ダムの恩恵は顕著であり感謝です。

また、その昔、「井」の改修工事に時のお奉行様宛に援助の嘆願書が出されており、資材やお救い米と称するものが下付されていることが稲枝の歴史(県立図書館)に記載されていました。今でいう「県費」に該当するものとの記述があります。

このように、昔々から公共の必要性の認められた底樋であり、現在起こっている問題点を聴きとめる部署があって当然と考えるものです。再度お考えを問います。

**答** 愛知川は昭和25年から愛知川中小河川改修としてスタートし、愛知川の過去の洪水氾濫を抑えるために計画しています。

基本的に、その当時から伏流水の利用は認識しており、愛知川の改修計画は天井川ですが、堤防を切り下げずに、堤防を後ろに引くという引堤工事を基本として、河床をなるべく切り下げないで、伏流水の利用を継続していただくという考え方です。

彦根側だけではなく、能登川側の地先の方にも沢山湧水があり、現場で利用されています。工事に先立ち、彦根側と同じように地域に入らせていただき、どのような形で湧水をそのまま利用していただけるか、あるいは伏流水の取水を継続していただけるかについて、地元の方と真摯に向き合って話をしながら、それぞれ必要な対策をこれまで講じてきたところです。

もともと愛知川は川の規模に対し非常に狭い川でしたので、洪水を安全に流下させるということが大切になっておりました。

従いまして川の中に堆積しておりました砂利は、さきほどコスト縮減のために砂利採取計画で認可したと申し上げましたが、仮に砂利採取計画がなかったとしても河川管理者自らが計画的に取ったところでもあります。

愛知川の洪水の安全を図ろうと思います。天井川ですから堆積した土砂は取り除く必要があると、それと一方では沿川で水文化が発達していると、そちらの方にも気を使うということで両方のバランスをいかに図るかで現場では大変苦心をしながらやってきたところです。

それぞれの「井」について、あるいは湧き水の水路等については、これまでも河川管理者としてできる必要な対策はやらせてきておりますし、今回も「湯の花井」がああいうかたちになりましたが、現場でしっかり状況を確認させていただいて、現場の判断で必要な対策、河川管理者として出来る対策を検討してまいりたいと思います。私も現場の課長をしておりましたので状況をよく存じております。その上流の「権現井」、「落尾井」、「前田井」につきましてもいろんな対策を土木事務所として講じてきたところです。「湯の花井」につきましても、現場の意見を聞いて対応していきたいと思っております。

河床が下がらないよういろいろ工夫してやっていただいた。しかし、現状は下がった。歴然としています。伏流水の必要をお認めいただく中で、どうぞ関連地域の皆さんの意見を聴く会を開き、早急に復元に向けて対処していただけるようお願いいたします。

